

学位論文要約

国語科教育における価値目標論の形成と展開に関する研究

広島大学大学院 人間社会科学研究科 博士課程後期
教育科学専攻 教師教育デザイン学プログラム 国語文化教育学領域

皆尾 賛

論文構成

序章 研究の目的・方法・意義

1. 研究の目的
2. 研究の方法
3. 研究の意義

第一章 興水実による価値目標論の提唱

第一節 戦後新教育批判としての「人間形成」概念

1. 国語科教育における「人間形成」
2. 戦後新教育批判としての旗印
3. 「人間形成」概念の解釈

第二節 興水実における「人間形成」

1. 戦前と戦後を一貫する原理
2. 価値目標論の提唱
3. 価値目標論の形成の意味

第二章 機能的国語教育論のひろがりとその意味

第一節 読解指導と機能的国語教育論

1. 機能的国語教育論の提唱
2. 学力論争の概要
3. 国語学力と態度の関係と機能的国語教育論
4. 機能的国語教育論の特質

第二節 基本的指導過程と基本的教材

1. 基本的指導過程の広がり
2. 基本的指導過程と基本的教材の関係
3. 基本的教材の条件と教材研究の標準化
4. 基本的教材の問題
5. 基本的教材の意義

第三章 特設「道徳の時間」との関係

第一節 「道徳の時間」の性格の変遷

1. 「資料」の問題
2. 青木孝頼の指導過程論

第二節 国語科と「道徳の時間」における教師の思考習慣

1. 価値目標論との相同
2. 教材と資料の関係

3. 指導過程の連絡

第四章 民間教育研究団体による批判

第一節 教育科学研究会国語部会の読み方教育

1. 教育科学研究会国語部会による批判と読み方教育の概要
2. 「理想」を読むこと

第二節 教育科学研究会国語部会と児童言語研究会の論争

1. 教育科学研究会国語部会からの批判
2. 論争の経過
3. 論争の争点と結果

第五章 読書指導との関連

第一節 国語科教育における読書指導の強調

1. 読書指導の強調の過程と阪本一郎の批判
2. 国語科教育における読書指導の位置づけ

第二節 価値目標論の位置づけ

1. 国語科の重要な領域としての読解指導
2. 現場の実情

第六章 「言語の教育」としての国語科と価値目標論

第一節 思考・認識への着目

1. 森山重雄の批判
2. 森島久雄の主張

第二節 教科における訓育的教授

1. 戦後の訓育論の変遷
2. 授業における訓育論
3. 杉山明男の教科における訓育論
4. 訓育的側面としての価値目標論の位置づけ

終章 研究の総括と今後の展望

1. 研究の総括－国語科における価値目標とは
2. 今後の展望

総引用文献一覧

研究の目的・方法・意義

本研究は、国語科教育における価値目標論がいかに形成され、国語科教育の進展とともにどのように展開してきたのか、そしてその意味を、「読むこと」の教育を中心にして明らかにする研究である。

価値目標とは 1950 年代後半に輿水実によって提起された言葉である。この輿水の価値目標論の提起は個体史的に見ればその前時代的発想から批判的に捉えられてきたが、一方で今日においても用語として存在しており、含意は様々であるが用いられているものでもある。すなわち価値目標は輿水の一思想、一用語として解すのではなく、国語科教育を営む際における重要性をもった今日まで命脈のあるものだと捉えるのが正鵠を射ているだろう。本研究はこの価値目標論をめぐる歴史的経緯とその意味を明らかにすることを目指している。

「読むこと」の教育において、教材の内容や思想あるいは学習者の認識・価値観・世界観に触れないことの方が珍しいのではないだろうか。国語科は言葉を通して自己や他者、世界について扱う教科である。むしろ問題はそうしたものを「目標」として記述しようとすることの意味である。また、時代や論者によって「価値目標」と表現されるものの内実は多様である。

よって、本研究では以下三点の研究の目的を設定する。

1. 価値目標論はどのような文脈でいかに形成されてきたのか。
2. 価値目標論は国語科教育の進展の中でどのように同時代の国語科教育に影響を与えたのか。
3. 国語科教育において価値目標論とはどのような意味をもってきたのか、もつのか。

本研究の方法としては、国語科教育において価値目標という言葉を導入した人物である輿水の言説を対象にし、彼がどのように価値目標論を提唱しそれを推し進めてきたのかを明らかにする。そして、同時代、価値目標論に対してどのような受容や批判があったのかを明らかにするために関連した領域や人物たちの言説との関係を考察する。

本研究は 1950 年代から 70 年代を中心とした国語科教育史研究の間隙を埋めるとともに、国語科特有とも言える価値目標論を考えていく上での歴史的な視座を獲得するという点で意義があると言える。

各章の概要

・第 1 章の概要

第 1 章では、国語科教育において価値目標を記述するように説いた輿水実の言説に着目し、価値目標論がどのように形成されたのかを 1950 年代の「人間形成」概念との間で考察した。

言語道具観であるとされた戦後新教育への批判は教材内容や文学教育の重要性の喚起として

「人間形成」の言葉をもって行われた。基本的には「内容」と「形式」で言うところの「内容」の喚起として受け止められたが、国語科教育の目的そのものを問い直す概念として様々な論者が自身の国語科教育観と重ねて国語科教育における「人間形成」を論じた。

興水は当初、国語科教育における「人間形成」はことばの力を育むことであり、特定の世界観や人生観ではないと説明していたが、戦前師の垣内松三とともに親炙した国語科教育論、「人間形成」論への回帰から徐々に読むことにおける「内容」の重要性を説くようになる。表向きはアメリカの教育心理学者であるグレイによる「価値」と「技能」とに分けた読むことの目標論の整理の影響によって価値目標論を提起するが、そこには同時代の「人間形成」の議論が関与していた。興水は自説を変更し、「人間形成」という抽象的な目的的概念に対して国語科における「内容」を包括する、価値目標と技能目標に分けるといふ具体的な枠組みを提起したのであった。ここでいう「価値」とは教材主義への復活という思潮と呼応することで、教材内容から導出されるものであるという性格が強かった。

・第二章の概要

第二章では、価値目標論の提唱と併せて唱導された機能的国語教育論とその具体化である基本的指導過程の同時代的意味を論じた。

機能的国語教育論は価値目標を主目標としそのための「内容」に技能を位置づけるという構造のものであった。戦後の国語科教育は技能が生活と結びつき発展的に学力を形成していくことが企図され、学力における「態度」の重要性が喚起されていたが、機能的国語教育論では技能が「内容」に位置づいており、技能が価値の獲得のためだけに用いられる構造になっているため、この「態度」面の志向が薄いものとなっていたといえる。機能的国語教育論を標榜する人物たちも「態度」の重要性は認めていたが、「生きてはたらく」というよりも基礎的な学力を確かにつけるといふ構造になっていたと言える。

そして、この機能的国語教育論が具体的な指導過程となったのが 1965 年の基本的指導過程であった。この基本的指導過程は戦前の三読法をベースにしており、だれもができる、ある程度できるとして打ち出されたものであったため、読解指導の方法に混迷していた 1960 年代にあって沖山光の読解指導論と結びつくなどして広がっていった。そして、その 2 年後に出されたのが「基本的教材」であり、これは「基本的指導過程を行うことが出来る」ということを一番に考えた教材論であり、読み取るべき文意と価値目標とが一点に結びつくことが重要だとされた。読み取るべき内容的価値と読みの方法とが直結していた基本的指導過程および基本的教材は基礎的な読みの能力の育成の習慣として広がっていった。

・第三章の概要

第三章では教材から導出された抽象的な価値観を内面化させようとする性格が強かった価値目標論は昭和 33 年版学習指導要領において特設された「道徳の時間」の授業との関係の中ではどのように位置づけられるのかということを考察した。

「道徳の時間」は特設された当初は生活指導的な側面があったが、文部省が資料集を全国に配布するなどして徐々に資料中心主義、価値主義的な傾向になっていった。1960 年代にそのことを推し進めたのは青木孝頼であり、青木は資料を通して「本質的な価値」を教える「価値の一般化」という方法を推し進め、1968 年には「基本過程」と称した指導過程を提唱することになる。ある教材、素材をもって抽象化された価値観を内面化させようとする目標観は価値目標と近似しており、同一の教師が国語科も「道徳の時間」も行う場合、国語科は読解指導を内容としつつ目標観としては同一のものが意識されたと考えられる。「基本的指導過程」も「基本過程」も「基本」が冠されており、こうした教師の読むことの教育における思考習慣が広がっていったと考えられる。

・ 第四章の概要

第四章では、1960 年代、価値目標論がどのように批判されたのか、その批判の内実を考察した。

日本教職員組合をはじめ、教育科学研究会国語部会や児童言語研究会は価値目標についてその意味をイデオロギー的観点から批判を行った。しかし、教科研の読み方教育は伝統的な三読法をベースにしており、客観的な読みを目指して「理想」を読み取らせようとするものであり、これは教材から導出された特定の社会的、抽象的な認識を学習者に読み取らせることを目標としていたものであった。これは価値目標論と近似しており、価値目標を批判しつつも同じ志向をしていたといえる。教材論に主眼を置かず、学習者の思考力の育成に主眼を置いた児言研は教科研と論争を行っているが、これは立場の違いを明確にただけで生産的な議論にはなっておらず、教材を媒介として一つの価値観や認識を内面化させようとする読むことの教育は同時代の盤石なセオリーであったといえることができる。

・ 第五章の概要

第五章では、第四次学習指導要領において強調された国語科における読書指導の強調と価値目標論の関係について考察を行った。

読解指導一辺倒の現状を是正するために提起された読書指導の強調は、子どもの行動や性格に働きかけようとする指導性の強い読書指導を推進してきた阪本一郎には些末なものに映った。読書指導の強調は読解指導の関連を促しながらも、国語科における読書指導と読解指導の枠組みを明確にし、国語科の責務は読解指導、精読であるということをも位置づけるとともに阪本のような目標観は価値目標論と読解指導の結びつきとして再確認された。また、価値目標という考え方自体は「国民性の育成」という物議を醸していた同時代の論点の中でも重要であることが確認され

た。しかし、言語技能の育成一辺倒への対処は 1970 年代の課題であり、価値目標論というよりも育むことばの力自体を問い直すという方向に向かって行った。

第六章の概要

第六章では、「落ちこぼれ・落ちこぼし」問題などから教育内容の精選が行われた第五次学習指導要領を中心に価値目標論の意味を位置づけた。

1970 年代、国語科で育む力として思考力や認識力が目標として中心化されていったが興水や森島久雄が価値目標の記述の重要性を説き続けるように価値目標の文言自体は引き継がれ、「何」を読ませるかということの意識化という点で重要視された。同時代の教科における訓育的教授においては教材内容による訓育、教材内容を獲得するプロセスにおける訓育などが問われていったが、杉山明男は同和教育を中心に西郷文芸学と関わりながら、「文学」による訓育的教授を推進していた。国語科における価値目標論とは、興水が「内容」の重要性を認識するための「旗印」と呼ぶように、教育全体の訓育的側面と教科教育とを結びつける回路として位置づけることができる。特定の抽象的な価値観を内面化させようとする一方通行的な価値目標論から今日では「ものの見方・考え方」の目標と広くとられ、今日においてもその用語は命脈を持っている。

研究の総括

1950 年代後半に興水によって提唱された価値目標、また本研究で扱った同時代のそれをめぐる動向というのは、一つの教材をどのように理解させるかという枠組みのもとで志向されてきたものだということが指摘できる。これは戦後新教育において推進された単元学習の衰退とその意義の再検討という時代の変遷の間隙とも呼応することである。すなわち、国語科が扱うのは言語それ自体ではない、ということは何の時代においても言われ、基本的に共有されてきたことであったが 1960 年代の教材主義的な時代において国語科における「内容」との関わりを担保する役目を価値目標論は担っていたと同時に、そこに教師側の「読むこと」の教育を通じた価値観や認識に対する意図性が表れていたと言えるだろう。そしてそれは様々な受容や批判を通して国語科教育の進展に寄与していた。

現在では幅広いものとなっている価値目標であるが、幅広いのであればそれは教科における訓育として捉えればよいことで、また「内容」との関わりで言えば単元学習などの蓄積がある。価値目標の記述の意義をあえて述べれば、価値目標というのは指導目標であるので、記述することによって教師側の「読むこと」の教育の成果としてどのようなことを考えさせようとしているのか/させてしまうのかという部分が明らかになり、授業が公共のものとなるという意義があるだろう。ただ、こうした意義を踏まえても改めて価値「目標」なのかというところは疑念が残るところであり、今後価値目標論の議論が俟たれる。

総引用文献一覧

Gray,W.S.(1956) *The Teaching of Reading and Writing*,Paris:UNESCO.

青木誠四郎(1949)「学力の新らしい考え方」『新教育と学力低下』原書房, 5-20, 所収: 山内乾史・原清治編(2010)『日本の学力問題 上巻 学力論の変遷』日本図書センター, 31-38

青木孝頼(1966)『道徳価値の一般化』明治図書

青木孝頼(1968)『導入・展開・結末』明治図書

青木孝頼(1972)『講座 創造的道徳指導』明治図書

阿川弘之・望月久貴・井上敏夫・小野沢実・森島久雄(1971)「国語教育における教材をめぐって」『学校教育研究所年報』15, 39-52

池田匡史(2017)『戦後国語科における単元学習の展開に関する研究』広島大学大学院教育学研究科博士課程後期文化教育開発専攻国語文化教育学分野博士論文

石井庄司(1964)「国語教育における人間形成の歴史」『実践国語』25, 298, 穂波出版社, 134-146

石井英真(2010)「学力論議の現在—ポスト近代社会における学力の論じ方」松下佳代編『〈新しい能力〉は教育を変え
るか 学力・リテラシーコンピテンシー』ミネルヴァ書房, 141-178

井上敏夫(1958)「戦後の国語学力」広岡亮蔵編『現代学力体系2 国語の学力』明治図書, 73-89

井上敏夫(1969)「読解指導と読書指導」全国大学国語教育学会編『国語科教育』16, 29-36

井上敏夫・滑川道夫・藤原宏(1971)「座談会 読解指導と読書指導をめぐって」『教育科学 国語教育』No.147, 5-22

石森延男(1953)「読みの方法過程」『実践国語』14, 158, 穂波出版社, 13-18

石森延男(1960)「第13回全日本国語教育協議会報告」所収: 飛田隆(1983)『戦後国語教育史下』教育出版センター, 250-263

石山修平(1956)「コミュニケーションと人間形成」全日本国語教育協議会編『明治図書講座/国語教育/第1巻/国語教育と人間形成』明治図書, 7-32

大木正之(1967)「興水氏の教授=学習観・世界観」『国語教育研究』No.11, 一光社, 所収: 大木正之編(2003)『国語教育の過去・現在・未来像』一光社, 114-129

大久保忠利(1967)「興水実氏への人間的対決」『国語教育研究』No.11, 一光社, 所収: 大木正之編(2003)『国語教育の過去・現在・未来像』一光社, 84-100

大槻一夫(1967)「現場は基本的教材の選定を渴望」『教育科学 国語教育』No.108, 45-51

大槻和夫(1963)「基礎学力をどうつけるか」『教育科学 国語教育』No.38, 明治図書, 所収: 『国語教育基本論文集成 3 国語科教育基礎論3/学力論』明治図書, 407-415

大槻和夫(2001)「価値目標」大槻和夫編『国語科重要用語300の基礎知識』明治図書

大橋精夫(1963a)「現代教育における訓育論の課題」『現代教育科学』No.57, 123-131

大橋精夫(1963b)「現代教育における訓育論の課題」『現代教育科学』No.59, 123-131

奥田靖雄(1962)「よみ方教育論における主観主義」『教育』141, 麥書房, 所収: 国分一太郎・奥田靖雄編(1962)『読み

- 方教育の理論』 麥書房, 103-137
- 小和田仁(1995)「道徳時間の特設と国語科目標観の変化」『教育科学 国語教育』 No.510, 明治図書, 82-86
- 垣内松三(1934)『国語教育科学概説』 文学社
- 海後宗臣(1962)「昭和 37 年における小中学校特設「道徳」の実施及び教科書使用状況と検定教科書問題についての意見調査報告」『海後宗臣著作集』 6
- 勝尾金弥(1965)「佐多稲子作「狭い庭」の授業記録」『教育国語』 1, 麥書房, 131-153
- 勝田守一(1962)「学力とは何か」『教育』 7月号, 国土社, 10-14, 24-27
- 勝部真長・内海巖・澤田慶輔編(1960)『小学校道徳授業の探究 5・6年』 明治図書
- 河野智文(2007)「「人間形成」を観点にした一九五〇年代の国語科教育に関する考察」『福岡教育大学国語科研究論集』 48, 13-24
- 熊谷孝(1965)「国語教育時評：静かな論争を期待する」『教育科学・国語教育』 No.77, 91-97
- 倉澤栄吉(1958)「国語学力と人間形成」 広岡亮蔵編『現代学力体系 2 国語の学力』 明治図書, 11-18
- 幸田国広(2021)『国語教育は文学をどう扱ってきたのか』 大修館書店
- 国分一太郎(1963a)「国語教育時評第 4 回 運動・点・線・面記」『教育科学・国語教育』 58, 108-112
- 国分一太郎(1963b)「読み方教育・ひとつ大事」『教育』 国土社, 59-65
- 国分一太郎(1964)「「部分から全体へ」の重視説ではないか」『教育科学・国語教育』 No.63, 37-41
- 国分一太郎(1966)「国語教育におけるいわゆる「近代化」」 国分一太郎・奥田靖雄編『続 国語教育の理論』 麥書房, 8-21
- 小久保美子(2000)「戦後期の国語教育目標における「習慣」と「態度」をめぐる概念」『日本語と日本文学』 31, 筑波大学国語文学会, 27-37
- 奥水実(1948)『国語のコース・オブ・スタディ』 非凡閣
- 奥水実(1954a)『人間形成の国語教育』 有朋堂
- 奥水実(1954b)『国語学力 その学年基準』 有朋堂
- 奥水実(1956)『言語経験と教室活動』 有朋堂
- 奥水実(1958)『読み方教育学』 明治図書
- 奥水実(1959)『新しい学力観に立つ国語指導法』 明治図書
- 奥水実(1960)『国語教育用語辞典』 明治図書
- 奥水実(1961)『国語教材のあり方と学習指導』 明治図書
- 奥水実(1962)『国語教育の実践原理』 明治図書
- 奥水実(1963a)「価値目標対技能目標の問題」『国語教育の近代化』 12, 1-24
- 奥水実(1963b)「国語教育近代化の精神と方向」『国語教育の近代化』 No.11, 1-29
- 奥水実(1964)「国語教材の変化とこれに対処する方法」 文部省(1964)『初等教育資料』 175, 6-10
- 奥水実(1965a)「機能的国語教育の『これまで』と『これから』」『国語教育の近代化』 32, 1-25

- 奥水実(1965b)「国語科における態度・技能・知識の考え方と導き方」『国語教育の近代化』33, 1-20
- 奥水実(1965c)『講座・国語科の基本的指導過程/第1巻・基本的指導過程の理論』明治図書
- 奥水実(1965d)「国語教育の人間形成」『国語教育の近代化』33, 1-19
- 奥水実(1966a)「国語教育の教養課題」『国語教育の近代化』48, 1-16
- 奥水実(1966b)「国語科の基本的指導過程—検討に答える—」『教育科学 国語教育』No.89, 78-86
- 奥水実(1967a)「基本的教材の選定と教材研究の標準化」『教育科学 国語教育』108, 5-23
- 奥水実編(1967b)『講座・国語科の基本的教材/第1巻・基本的教材の理論』明治図書
- 奥水実編(1967c)『講座・国語科の基本的教材/第2巻・文学の基本的教材』明治図書
- 奥水実・小川末吉・風間章典・瀬川栄志・中津留喜美男(1969)「一月の読解と読書」『国語教育の近代化』No.78, 23-56
- 奥水実(1967d)「読解と読書との問題」『国語教育の近代化』No.65, 1-13
- 奥水実(1968)「国民性の育成と国語教育」『教育科学 国語教育』No.115, 所収:『国語教育における奥水理論』明治図書, 173-187
- 奥水実・小川末吉(1968)『国語科自由読書の指導』明治図書
- 奥水実(1970)「国語教育の内容的価値, 特に文学教育の価値について」『国語教育の近代化』96, 1-24
- 奥水実・深川恒喜・望月久貴・益田勝実(1970)「座談会 文学教育か読書教育か」『教育科学 国語教育』No.135, 5-25
- 奥水実(1982)「読解指導の到達度評価」『教育科学・国語教育』305, 126-131
- 奥水実(1983a)「価値目標のない指導案」『教育科学・国語教育』312, 126-131
- 奥水実(1983b)「言語の教育と価値目標」『教育科学・国語教育』314, 126-131
- 奥水実(1990)『昭和国語教育个体史』溪水社
- 西郷竹彦(1968)「全体に共通する特色はありえない」『教育科学 国語教育』No.115, 『国語教育における奥水理論』明治図書, 202-208
- 西郷竹彦(1975)『文学の読み方・教え方』部落問題研究所
- 阪本一郎(1965)「読書による価値意識の育成」『児童心理』19(2), 210-215
- 阪本一郎(1969a)「1968年の読書科学」『読書科学』46, 1-4
- 阪本一郎(1969b)「読書指導の新段階」『学校図書館』219, 9-14
- 阪本一郎(1969c)「読書教育構造論」信濃教育会編『信濃教育』992, 10-19
- 阪本一郎(1971)『現代の読書心理学』金子書房
- 佐多稲子(1965)「「狭い庭」の授業記録を読んで」『教育国語』1, 麥書房, 154-156
- 佐藤洋一(1995)「読書指導実践の広がり」『戦後国語教育50年史のキーワード』(『教育科学・国語教育』臨時増刊号, No.510)明治図書, 137-140

- 児言研常任委員会(文責：林進治)(1965)「一読総合法に寄せられた批判とその回答」『児言研国語』No.4, 98-104
- 渋谷孝編(1998)『国語科の基本的技能・基本的指導過程他(現代国語教育論集成・輿水実集)』明治図書
- 渋谷孝(2006)「輿水実の国語科教育論の「自己撞着」の克服の手立て—現代国語科教育論史の一問題」『国語教育史研究』6, 1-24
- 城丸章夫(1973)「授業における「訓育」の本質と可能性」『現代教育科学』191, 5-17
- 杉山明男(1975)『はぐるまの授業』部落問題研究所
- 杉山明男(1978)「教科指導における訓育作用」日本教育方法学会編(1978)『教育方法9 現代訓育理論の探究』明治図書, 82-94
- 杉山悦子(2019)「戦中・戦後の「読書指導」: 阪本一郎の場合」日本図書館情報学会編『日本図書館情報学会誌』65(1), 1-17
- 鈴木敏彦(1978)「授業における訓育の研究動向」日本教育方法学会編(1978)『教育方法9 現代訓育理論の探究』明治図書, 180-187
- 須田実(1995)『戦後国語教育リーダーの功罪』明治図書
- 瀬川栄志(1988)「人間形成」国語教育研究所編(1988)『国語教育研究大辞典』明治図書, 652-653
- 瀬川栄志監修・金久慎一編(2008)『価値目標設定で「文学文の読み方」授業を変える(低・中・高)』明治図書
- 高瀬匡雄(2014)『奥田靖雄の国語教育論—子どもたちをすぐれた日本語のこない手に—』むぎ書房
- 高宮正貴(2022)「道徳授業における「価値の一般化」の再検討—展開後段における「再特殊化」の導入—」『大阪体育大学教育学研究』6, 51-63
- 高森邦明(1979)『近代国語教育史』鳩の森書房
- 竹ノ内一郎(1963)『道徳指導における読み物の利用』明治図書
- 田近洵一(1983)「国語学力論の構想」全国大学国語教育学会編『国語学力論と実践の課題』明治図書, 39-56
- 田近洵一(1999)『戦後国語教育問題史 増補版』大修館
- 田近洵一(2013)『現代国語教育史研究』富山房インターナショナル
- 永田繁雄(2012)「資料中心の道徳教育—「資料を」か「資料で」か—」行安茂・廣川正昭編(2012)『戦後道徳教育を築いた人々と21世紀の課題』教育出版, 252-262
- 竜田徹(2022)「国語科学力・目標論に関する成果と展望」全国大学国語教育学会編『国語科教育研究の成果と展望III』溪水社, 19-26
- 田中耕治(2008)『教育評価』岩波書店
- 田中豊太郎(1953)「国語学習指導上の問題点二. 三」『教育研究』10, 初等教育研究会, 43-46
- 田中久直(1967)「重層構造にとらえた国語科の目標」『教育科学 国語教育』No.101, 明治図書, 所収:『国語教育基本論文集成3 国語科教育基礎論(3)学力論』明治図書, 318-322
- 谷頭和希(2022)「輿水実研究の困難さとその克服—振る舞いに注目して—」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要・別冊』29, 2, 39-50

- 時枝誠記(1964)「一読主義は読解指導の正しい目標」『教育科学 国語教育』No.63, 16-21
- 中村敦雄(2020)『国語科教育における能力主義の成立過程—興水実と近代化の精神, 1931-1977—』溪水社
- 中村百合子(2009)『占領下日本の学校図書館改革—アメリカの学校図書館の受容』慶應義塾大学出版会
- 永田麻詠(2015)「インクルーシブな国語学力の構想—「読むこと」の授業づくりをめぐる」インクルーシブ授業研究会編『インクルーシブ授業をつくる—すべての子どもが豊かに学ぶ授業の方法—』ミネルヴァ書房, 83-93
- 奈良小学校(1964)『一読主義読解の方法』明治図書
- 難波博孝(2014)「国語科教育における実践研究の考え方と実際」『言語文化教育研究』12, 29-48
- 西原慶一(1957)「国語・国語教育時評9」『実践国語』18, 195, 穂波出版社, 86-89
- 西村正三(1954)「国語教育の盲点と研究の方向」『実践国語』15, 160, 穂波出版社, 54-59
- 二宮衆一(2017)「子どもたちの自立と共同を支える生活指導」田中耕治編『戦後日本教育方法論史 上』ミネルヴァ書房, 87-106
- 日本教職員組合, 執筆: 国分一太郎・奥田靖雄(1966)「第1分科会 国語教育」『日本の教育: 教育研究全国集会報告』15, 国土社, 19-43
- 日本教職員組合編(1968)『国語教育 私たちの教育課程研究』一ツ橋書房
- 日本教育方法学会編(1978)『教育方法9 現代訓育理論の探究』明治図書
- 浜本純逸(1978)『戦後文学教育方法論史』明治図書
- 浜本純逸(1981)「価値目標」野地潤家編『国語科重要用語300の基礎知識』明治図書
- 浜本純逸(2011)『国語科教育総論』溪水社
- 林進治(1964)「総合法による読解指導」『教育科学 国語教育』No.63, 5-15
- 春田正治(1966)「訓育理論と生活指導」日本教育方法学会編(1966)『教科内容・指導方法の現代化』明治図書, 121-136
- 飛田隆(1954)「昭和二十八年に於ける国語学界の展望/国語教育」『國語學』18, 武蔵野書院, 73-76
- 飛田隆(1983)『戦後国語教育史 上・下』教育出版センター
- 飛田多喜雄(1954)「巻頭言」『実践国語』15, 171, 穂波出版社, 5
- 飛田多喜雄(1962)『機能的読解指導』明治図書
- 飛田多喜雄(1965)『国語教育方法論史』明治図書
- 飛田多喜雄(1984)『国語科教育方法論体系2 国語学力論と教材研究法』明治図書
- 飛田多喜雄(1988)「人間形成としての国語教育」国語教育研究所編(1988)『国語教育研究大辞典』明治図書, 653-655
- 広岡亮蔵(1953)『基礎学力』金子書房
- 広岡亮蔵(1958)「どんな学力を・どんな基礎学力を」『現代学力体系1 学力と基礎学力』明治図書, 93-114
- 藤岡信勝(1979)「わが国における学力論争の歴史と今日の問題」『講座 日本の学力』3, 19-50
- 藤原宏(1967)「国語科における読書指導の特色」『教育科学 国語教育』No.106, 12-19
- 本田敏明(1978)「訓育と生活指導の概念」日本教育方法学会編(1978)『教育方法9 現代訓育理論の探究』明治図書, 166-172

- 榊井英人(2006)『国語力観の変遷—戦後国語教育を通して』溪水社
- 増田信一(1999)『読書教育実践史研究』学芸図書
- 間瀬正次(1982)『戦後日本道徳教育実践史』明治図書
- 書
- 間瀬正次(1989)『今後の道徳教育を考える』教育開発研究所
- 宮坂哲史(1964)「生活指導の今日的課題」日本教職組合編『国民のための教育の研究実践 生活指導編』1-14
- 宮崎典男(1963)「一読主義にたいする疑問—指導過程の自主性を確立するために」『教育科学・国語教育』60, 44-49
- 宮崎典男(1966)「授業過程の整理と実践の発展のために」『教育国語』4, 麥書房, 所収: 国分一太郎・奥田靖雄編『続国語教育の理論』, 麥書房, 112-137
- 三輪民子(2021)「「読むこと」の学習指導論の研究:「トンネル式読解」の場合」日本体育大学提出博士論文
- 村上呂里(2008)『日本・ベトナム比較言語教育史—沖縄から多言語社会をのぞむ』明石書店
- 森島久雄(1976)『現代国語教育序説—人間回復を目指して—』教育出版
- 森山重雄(1967)「言語機能主義を原理的に乗り越えよ」『教育科学・国語教育』101, 9-13, 所収: 野地潤家・山元隆春編『国語教育基本論文集成』1, 310-317
- 文部省(1967)「文部時報」1967年, 9月号, 30-43
- 文部省(1968)『学校における道徳教育 小学校』
- 八木雄一郎(2019)「読解指導と読書指導」日本読書学会編『読書教育の未来』ひつじ書房, 169-177
- 吉田昇(1965)「基本的指導過程は成立するか」『教育科学/国語教育』No.86, 12-18
- 吉田昇(1968)「国語教育の歴史を逆行させる危険」『国語教育における輿水理論』明治図書, 194-201
- 吉田雅昭(2022)「文学教育に関する奥田靖雄の主観主義批判について—日本語学的立場からの国語教育論—」『国語学研究』61, 16-30
- 吉本均(1970)『現代授業集団の構造』明治図書
- 吉本均(1974)『訓育的教授の理論』明治図書
- 渡部哲男(2010)『「国語」教育の思想 声と文字の諸相』勁草書房